台大日本語文研究第 38 期
2019 年 12 月，頁 55-73
2019-09-05 收稿，2019-11-30 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 201912_(38).0003

麥生本系統《源氏物語》的校訂態度
—由初音卷與胡蝶卷中與玉鬘相關的描寫觀之—

林欣慧*

摘要

《源氏物語》除主流的青表紙本系統及河內本系統外，尚有其他不同文本。其中以麥生本為代表的文本異文相對豐富，且共可見於三套寫本內，應曾具一定數量的閱讀者，故而值得探討。本論文為此系統文本研究之一環，以初音卷及胡蝶卷為考察對象。

然而，由於目前相關論著中，對於此類文本是否每卷皆可作為相對於主流文本的「別本」使用這點看法有所歧異，因此在考察這兩卷的文本時，筆者選擇先調查其中是否同樣具備此系統文本的其他卷中可見的特徵，以此確定初音卷與胡蝶卷是否同樣具備「別本」之性質。

透過以上探討，確定此二卷亦有與他卷共通之特徵，可作為此系統之文本使用後，再針對其他性質的異文進行考察。其結果發現，與玉鬘相關的描寫中，有與前後卷用詞不一致之處。筆者因而由這點對此系統之校訂態度以及其成立背景進行推論，並進一步指出今後考察此類文本時須注意之事項。

關鍵詞：源氏物語、大島本、河內本、麥生本、阿里莫本

* 國立台灣大學日本語文學系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The Position on the Revision of *The Tale of Genji* in the Case of the Version Represented by Munyuubon: According to the Description About Tamakazura in Hatune Volume and Kotyou Volume

Lin Hsin Hui*

Abstract

There are different versions of The Tale of Genji besides Aobyousibon and Kawatibon. Especially the version represented by Myunyuubon is rather abundant in different description. Furthermore, this version can be discovered in three manuscripts, which means there were more than a few readers of this version.

However, there are different opinions about the classification of each volume. Therefore, it is necessary to re-examing the classification of Hatune volume and Kotyou volume by confirming the features discovered in the other volumes belong to this version.

After the classification of the two volumes confirmed by the examination mentioned above, the deeper research of this version can be started. As a result, discordance can be found in the descriptions about Tamakazura. According to the result, the possible policy for the revision of this version can be infered.

Key words: *The Tale of Genji,* Ooshimabon, Kawatibon, Munyuubon, Arimakabon

* Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

麦生本系統『源氏物語』の校訂姿勢
—初音巻と胡蝶巻における玉鬘に関する描写から—

林欣慧*

要旨

主流の青表紙本系統と河内本系統と読み比べる際に、比較的に多くの異文を見せる、ある系統の『源氏物語』の本文は、麦生本をはじめ、合計三つの写本に見られる。この数から、この系統の本文にはかつてある程度、享受者がいたことが想定され、考察する価値があると考えられる。本稿はこの系統の本文を研究する一環として、初音巻と胡蝶巻を取り上げる。

各巻の性質について異なる見解が見られるため、考察するにあたり、まず同系統の他巻において把握した、いくつかの特徴が存在するかどうかを確認する。これによって、上述の二巻がいわゆる「別本」的性格を有するものであるかどうかを検証した。

その結果、この二巻にも共通する特徴が見られ、同系統の本文として利用できることを確認した。これを踏まえ、他の異同について考察したところ、玉鬘に関する描写には前後の巻と一致しない点が認められる。このことから、同系統の校訂姿勢と成立背景について推論し、今後麦生本系統を研究する際に心がけるべき点に言及した。

キーワード：源氏物語、大島本、河内本、麦生本、阿里莫本

* 国立台湾大学日本語文学科助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

麦生本系統『源氏物語』の校訂姿勢
—初音巻と胡蝶巻における玉鬘に関する描写から—

林欣慧

一、はじめに

『源氏物語』の本文は池田亀鑑氏によって青表紙本系統、河内本系統、および「別本」の三種類に大別されている[1]。しかし、一つの祖本を共有し、同じ特徴を有する写本の総称として使用される前二者と異なり、「別本」とは、あくまで青表紙本系統にも、河内本系統にも属さないことから使用された名称にすぎず、各々の写本は必ずしも性格が共通しているとは限らないため、その実態については精査する必要がある。

中でも、室町末期の成立とされる[2]麦生本に見られるある種の本文は、前述した主流の二系統と比較される際に、比較的に異文が豊富である。その上、このような本文は麦生本のみならず、同じく室町末期に成立した中京大本と近世に書写された阿里莫本の二本[3]にも見られる。『源氏物語』の写本が多数あるとはいえ、三つの写本にその存在が確認できることから、この系統の本文には、かつてある程度、享受者がいたことが想定され、その成立背景と校訂意図について考察する価値があると言える。

しかし、この系統の本文を利用する際に、「別本」的な性格を有するものとして採用しうる巻の判定は必ずしも確固たるものであるとは限らない。池田氏は『源氏物語大成』の各巻頭に校異に使用した写本を示しているが、一部の巻において、麦生本系統の写本の名前

---

1 池田亀鑑（1979）『源氏物語大成』八版、東京都、中央公論社。

2 岡嶌偉久子（2010）『源氏物語写本の書誌学的研究』初版、東京都、おうふう。「全巻の各巻末に「天文十五年書之　主麦生鑑綱」との署名がある」（p.241）の一節による。

3 前掲書において、中京大本については「書写年代は、紙質及びその筆跡等からは麦生本と同時代室町極末期頃と思われ」る（p.281）とあり、阿里莫本についても、「元禄五壬申五月」（p.217）と、その奥書の翻刻を示している。

臺灣大學圖書館典藏資料庫

が見当たらず、「別本」の性格を持つものとして認められていなかったことが分かる。一方、近年、岡嶌偉久子氏から、その採択について疑義が呈されている[4]。

このような異論が存在することに鑑みて、先行研究の判定に頼らず、先に各巻の性質について改めて調査し、別本として使用しうることを自ら確認した上で、はじめて麦生本系統の成立背景と校訂意図に関する考察に進むべきと考えられる。本稿では、胡蝶巻と初音巻を取り上げる。

考察に際し、青表紙本系統は大島本（但し、初音巻は池田本）を、河内本系統は尾州家河内本を使用する。前者は『大成』に、後者は秋山虔・池田利夫編『尾州家河内本源氏物語』[5]による。麦生本系統に関しては、中京大本は若菜上・下巻、橋姫巻、総角巻および早蕨巻の五巻しか現存しておらず、本稿で取り上げる二巻とも欠落しているため、麦生本・阿里莫本のみ取り上げることにした。翻刻は伊井春樹他編『源氏物語別本集成』[6]による。引用テキストの末尾には、大島本・池田本・尾州家本は頁数（漢数字）・行数（算用数字）、麦生本・阿里莫本は別本集成の文節番号を示す。また、引用部分には文意の明瞭化を図るために、濁点・句読点・鍵括弧を私に付し、踊り字も横書の体裁を考え、＜踊り字＞で示すことにした。

二、初音巻と胡蝶巻の性質

本稿では初音巻と胡蝶巻を取り上げる。この二巻は『大成』の校異リストにおいて麦生本と阿里莫本の名前が挙げられており、池田氏によって、別本的性格を有するものと判定されていたと考えられ

4 注2岡嶌（2010）には桐壷巻の採択結果について「麦生本のみが別本として『大成』に採用されているのだが、少なくとも麦生本を別本とするなら阿里莫本もそうであろう」（p.229）とあり、夕顔巻についても「独自の異文を比較的多く持つ巻である」（p.231）とあり、池田氏による判断に異議を唱えている。その上、池田氏こそ採用しなかったが、諸本にない独自の語句が見られる一部の巻を、「いわゆる別本となる筈のもの」（p.221）と評価している。

5 秋山虔・池田利夫編（1977）『尾州家河内本源氏物語　第二巻』東京都、中央公論社。

6 源氏物語別本集成刊行会（1993）『源氏物語　第六巻』初版、おうふう

臺灣大學學術期刊資料庫

るが、この二巻が果たして別本として利用しうるかどうかを自ら確認したい。

池田氏によって別本と判定された巻には、次のような特徴が見られる。まず、文意の明瞭化のために、前後の文章と齟齬し、裏目に出る場合もあるが、適宜説明の語句を付け加える点が挙げられる。逆に、類義表現などのような、物語の進展上必ずしも必要ではない箇所を削除することもある。また、より「正統的」な表現を心がけた結果なのか、語句を前後の場面で使用されたものに置き換える点も特徴的である。なにより、他本において終止形が「おぼす」もしくは「おぼゆ」である動詞を「おもほす」もしくは「おもほゆ」という形に書き換える傾向が目立つ。

そのため、本論で取り上げる二巻の性質について考察する際には、上述の特徴の有無を判断の基準としたい。

（一）「おもほす」と「おもほゆ」の使用状況

当該語彙の使用状況を調査する際の手順は次の通りである。まず、『別本集成』の本文を精読し、大島本と河内本を含め、諸本における「おぼす」と「おぼゆ」、もしくは「おもほす」と「おもほゆ」が使用されている箇所をできる限り記録した。ただし、目移りなどによる不備も考えられるため、調査の精度を高めるべく、『CD-ROM 版角川古典大観「源氏物語」』[7]における大島本の翻刻本文の語彙を検索する機能も利用した。

次に、上述した作業によって得られた用例に基づき、各写本における関連語彙の数を計算した上で、その中で「おもほす」もしくは「おもほゆ」の語形を取る用例の割合を確認した。その結果、各写本の使用状況が明らかになった。

先に初音巻について説明する。『別本集成』において、同巻は底本として麦生本を、校合用に大島本を、校異用に保坂本、阿里莫本、国冬本、東大本および尾州家本を使用している。諸本は共通して、

7 伊井春樹（1999）『CD-ROM 版 角川古典大観「源氏物語」』角川書店

臺灣大學學術期刊資料庫

終止形が「おぼゆ」である箇所が 1 例、「おぼす」である箇所が 19 例見られ、合計 20 例数えられるが、大島本と尾州家本において、「おもほゆ」もしくは「おもほす」が使用される箇所は管見の限り、1 例もなかった。また、それ以外の写本に関しても、国冬本、東大本そして『大成』の池田本に一例ずつ見られるのみである。

一方、上述の 20 例中、麦生本・阿里莫本とも「おもほす」もしくは「おもほゆ」の語形を使用した例は、上述した国冬本、東大本および池田本のそれと共通した箇所を含めて 17 例も数えられる。その上、阿里莫本にも独自の 1 例がある。同系統における関連語彙の八割以上が他本と異なる形で使用されていることが分かった。

次に胡蝶巻の状況について説明する。『別本集成』において、同巻は底本として陽明文庫本を、校合用に大島本を、校異用に保坂本、麦生本、阿里莫本、国冬本および尾州家本を使用している。その中、「おぼす」もしくは「おぼゆ」を使用した箇所として、大島本には 51 例、尾州家本には 55 例も数えられるにも関わらず、「も」付きの語形を使用した箇所は両方とも 1 例しか確認できない。

これに対して、麦生本系統に見られる、麦生本独自の 2 例を含めた 55 例の中で、「も」付きの形を取った用例として、麦生本・阿里莫本共通のものは 43 例も数えられ、同じく八割を超えている。

以上の調査から、初音巻と胡蝶巻はともに他本と異なる語形を使用するという特徴を有することが明らかである。また、同系統に属する他の特徴も確認できる。

（二）その他の特徴

本節の冒頭で述べたように、麦生本系統には、文意の明瞭化を図った増補と削減、および前後の語彙との一致を目的とした置き換えによる異文が見られる。

まず増補について見てみたい。増補された箇所には下線を施す。初音巻からは次のような例が挙げられる。

◆資料①

【池田本】・【尾州家河内本】

臺灣大學學術期刊資料庫

やう＜踊り字＞あけゆけば、みづむまやにてことそがせ給べき

を、れいあることより（事）・ほかに×・・・もさまことに事（こと）・くはへて…（七七四 12-14）・（一九五 11-12）

【麦生本】・【阿里莫本】

やう＜踊り字＞明ゆけば、みづむまやにてことそがせ給べきを、御まうけ、れいのある事よりほかにさまことに事くはへて…（231430‐1443）

男踏歌の水駅として六条院が定められたが、一行が到着した際には夜も明け方になってしまったため、簡略に済ませるはずのところを、しきたり以上に盛大にもてなした。

既に「水駅」があるため、「れいのある事よりほかにさまことに事」加えられたのが「もてなしのための準備」ということは文脈から推測できるが、池田本と尾州家本に比べ、「御まうけ」という説明を付け加えることによって、麦生本系統の本文はより理解しやすくなった。

胡蝶巻にも文意を補足するための例が見られる。

◆資料②

【大島本】・【尾州家河内本】

内（うち）・のおほいとのゝ君（きみ）・たちはこの君（きみ）・にひかれてよろづにけしきばみ、わびありくを…（七八八 04-05）・（二〇三 05-06）

【麦生本】・【阿里莫本】

内のおとゞの君たちは此君にひかされてつねにおはして、万にけしきばみ、わびありくを…（240936‐43）

同巻において、玉鬘は源氏の計らいにより、人々が心を寄せる存在となった。その玉鬘に心酔する描写に「つねに」云々の一節を付け加えることによって、内大臣の子息たちの玉鬘に対する熱意はより具体的に説明されることになった。

次に、削減の例を見る。当該箇所には波線を施す。

臺灣大學學術期刊資料庫

初音巻には、このような場面がある。明石の君の優美な姿に心を引かれ、元日であるにも関わらず、源氏は紫の上の春の御殿ではなく、冬の町に泊まることにした。

◆資料③

【池田本】・【尾州家河内本】

あたらしきとしの御さはがれもやとつゝましけれど、こなたにとまり給ぬ。なを(猶)おぼえことなりかしとかた(×××××××)＜踊り字＞にこゝろ(心)をきておぼす。(七六八 10-12)・(一九二 03-04)

【麦生本】・【阿里莫本】

あたらしき年の御さはがれもやとつゝましけれど、こなたにとまり給ぬるを、おぼえことなりかしとかた＜踊り字＞にも心をきておぼす。(230676-88)

主流の系統に属する二本にあった「なを」を削除し、文をつなげ、この事態を目的語化することによって、六条院の他の女君がこの事態を不愉快に思う状況が、より直截に表れることになった。但し、初音巻の削除は総じて短い語彙に施されるものが多い[8]。

これに対して、胡蝶巻には比較的に長い文が削除された例が見られる。六条院で行われた秋好中宮の季の御読経の様子を描く場面に、以下のような一節がある。

◆資料④

【大島本】・【尾州家河内本】

おとゞの君をはじめたてまつりて、みなつきわたり給ふ(・)。殿上人などもの(×)こるなくまいる。(七八五 09-10)・(二〇一 14-15)

8 資料③の他には、「うぐひすもおもふ心あらんかし」(230244-45)の「おもふ」を、「はつねおしみ給べき方にもあらずかし」の「方」(230273-76)を削除する例など、四箇所ほど挙げられる。

臺灣大學圖書館典藏資料庫

【麦生本】・【阿里莫本】

おとゞの君をはじめ奉りて、殿上人などもの残り・こりなくまいり給へる。（240610-19）

源氏をはじめ、参加者が多数いる盛況を説明する文言である。主流にあたる二本をはじめ、他の写本には「みなつき…」という参加者がずらりと着座した描写が見られるが、麦生本系統にはそれがなく、「殿上人も」の一部のみ残っている。

しかし、「をはじめ」と「…も残りなく」の言い回しから、人々が可能な限り参集したという状況は既に読み取れる。そのため、「みな…」云々の一節を削除しても、文意は確かに損なわれることがない。寧ろ、類義的表現が削除されたことによって、明快になったとも言える。

最後に、用語の一致化を図り、語彙を置き換えたと思しき箇所について見たい。当該箇所は囲み線で示す。

紫の上が住む春の御殿に仕える女房たちは、長寿を祝うために歯固めをし、祝い言を述べる。

◆資料⑤

【池田本】・【尾州家河内本】

ちとせのかげにしるきとしのうちのいはひ事・ことゞもして、そぼれあへるに…（七六三 11）・（一八九 08）

【麦生本】・【阿里莫本】

ちとせのかげにしるき年のはじめのいはひ事どもして、そぼれあへるに…（230089-96）

主流の二系統に、この一年という意味の「年の内」とあるのに対し、麦生本系統の二本はともに「年の初め」とある。この一節の前後を確認したところ、麦生本を含め、『別本集成』に採用された諸本

臺灣大學學術期刊資料庫

に、短い語句の異同こそあるが[9]、いずれも「うちわらひ給へる御有さまを年のはじめのさかへにみ奉る」（230120-27）の一節が見られる。新春のめでたい雰囲気に満ち溢れる春の御殿に顔を出し、戯れ事を言って笑う源氏の姿を、女房たちがめでる描写である。この一節があるため、資料⑤の改変を、前後一致化を図るためになされたものとして解釈できなくはない。

ただし、単に「年の内」の語意が理解しにくいという判断、もしくは本巻の巻名に合わせる意図によって校訂されたという可能性も考えられるため、必ずしも明確な例とは言えない。

これに対し、胡蝶巻には該当する例が比較的多く見られる。特に次に引用する文例には、語彙の一致化を重視する考えが明白に表れている。

◆資料⑥

【大島本】・【尾州家河内本】

「いまさらにいかならむ（ん）よかわかだけのおい（ひ）はじめけむ（ん）ねをばたづねん。なか＜踊り字＞にこそ侍（はべ）・らめ」ときこえ給ふ・を…（七九四 02-03）・（二〇六 13）

【麦生本】・【阿里莫本】

「今更（さら）・にいかならん世か竹の子のおひはじめけんねをばたづねん。中々にこそはべらめ」と聞え給を…（241643-53）

玉鬘が自身のことを竹にたとえ、今更その根にあたる生みの親を探すようなことができようかという趣旨の歌を詠んだ上で、尋ねたところで､かえって中途半端なことになるだろうと嘆く場面である。

玉鬘の譬えとして、主流の二系統に「わかだけ」が使用されているのに対し、麦生本系統には「竹の子」とある。何故、このような

[9] 阿里莫本には「うちわらひ給へり」とあり、保坂本と東大本は「御有さまを」ではなく、「御さま」とある。

臺灣大學學術期刊資料庫

異同が生じたのだろうか。実は、玉鬘の当該歌の前に、源氏による歌があった。

◆資料⑦

【大島本】・【尾州家河内本】

「ませのうちにねぶかくうへし竹（たけ）・のこのをのがよゝにやおひわかるべき」…（七九三 14）・（二〇六 11）

【麦生本】・【阿里莫本】

「ませの内（うち）・にねぶかくうへし竹のこのをのがよゝ（世々）にやおひわかるべき」…（241625-33）

内心玉鬘に秘かな恋情を抱きながら、唐突に打ち明けることもできないため、玉鬘が自分から去っていく寂しさを親の口調で嘆いた一首である。源氏が玉鬘のことを比喩する際に、「竹の子」という言葉を使用している。そのため、この源氏の歌を受けて、麦生本系統が玉鬘の返歌における当該箇所を変更し、一致させたと考えられる。胡蝶巻において、このような意図によってなされたと思しき用例は、初音巻より多く確認できた[10]。

本節の考察から、初音巻と胡蝶巻には確かに同系統の他巻に見られる特徴が確認でき、同系統の本文を有する巻として認められる。ただし、上述の用例からも分かるように、巻によって、各種類の校訂は必ずしも等しくなされているとは限らず、程度の差が感じられる。更に、人物描写においては、整合性に欠ける点も指摘できる。

三、玉鬘に関する描写

筑紫を脱出し、右近の計らいにより、源氏に引き取られる初登場の玉鬘巻から、髭黒大将との間に男児を儲け、その手中に収まった

[10] 例えば、他本に「昨日の女房ども」（240728-29）とある箇所が麦生本系統には「きのふのわかき人々」とあるのも、これらの中宮付きの女房が初登場した際に、「若き」と描かれていることを受けての改変と考えられる。

臺灣大學數位典藏資料庫

真木柱巻までの、夕顔の遺児玉鬘の恋物語とその成長を描く、いわゆる玉鬘十帖において、本稿で取り上げる初音巻と胡蝶巻はその第二と第三巻にあたる。

そのため、物語の作者がヒロインとも言える玉鬘に関する描写に力を注ぐということは想定できる。実際、胡蝶巻には以下のような箇所が見られる。異同にあたる箇所は二重下線を施す。

（一）胡蝶巻において

胡蝶巻において、玉鬘は源氏の計画通り、公卿たちがこぞって追い求める存在となった。後に蛍宮として認識される兵部卿宮と最終的に玉鬘を我が物にした髭黒大将のような、我こそと自負している人だけでなく、以下の引用文のような人たちもいる。

◆資料⑧

【大島本】・【尾州家河内本】

えしもうちいでぬ中（なか）・の思（おも）・ひにもえぬべきわかきむ（ん）だちなどもあるべし。（七八四 09-10）・（二〇一 03-04）

【麦生本】・【阿里莫本】

えしも打（うち）・いでぬは中の思にもえ（れ）ぬべきわか君たちなどあまたある。（240479-85）

打ち明けることはできないが、秘かに心を寄せている若い公達である。

このような年若い公達がいることを、主流の二系統は「あるべし」と表現しており、推測に止まっている。これに対し、麦生本系統の二本には「あまたある」とある。推測を表す「べし」を削除し、断定に変えるのみならず、「あまた」を付け加え、その人数の多さを誇張することによって、玉鬘を持ち上げる役割を果たしたと言える。

また、周辺の人物との関わりによって玉鬘を引き立てるに止まらず、その自身の敬語にも変化が見られる。

当初は親のように振舞うことに努めたが、夕顔の面影を宿す美し

臺灣大學圖書館期刊資料庫

い玉鬘を前に、源氏はついに恋心を吐露した。その源氏に手を取られた玉鬘は次のように反応する。

◆資料⑨

【大島本】・【尾州家河内本】

女（をんな）・・は心・・うく、いかにせむ（ん）とおぼえてわな〻かる（〻）・けしきもしるけれど（ば）…（七九六 12-13）・（二〇八 05-06）

【麦生本】・【阿里莫本】

女心うく、いかにせんとおもほして、わな〻かる〻けしきもしるければ…（241970-77）

親のように接してきた男性に唐突に告白されたことを受け、一人の女性として、我が身がつらく、為す術がないと感じられ、思わず体が震える。この源氏の求愛に対する玉鬘の感覚を描く際に、青表紙本系統と河内本系統には「おぼ」ゆが使用されている。一方、麦生本系統の二本には「おもほ」すとある。敬語の程度が高くなっており、明らかに玉鬘を持ち上げる表現に変更されていることが分かる。

このように、麦生本系統は胡蝶巻では物語の重点に合わせて、ヒロインにあたる玉鬘の待遇表現を意図的に高めることによって、物語の重点が分かりやすくなるような工夫が施されている。

しかし、初音巻の場合にはこのような特徴が認められない。同じく玉鬘十帖に属しているにも関わらず、他の写本と比較する際に、玉鬘を持ち上げるために行われた改変は、初音巻においては特に見当たらなかった。その上、次のように気がかりな点が指摘できる。

（二）初音巻において

初音巻の問題点について説明する前に、玉鬘十帖の首巻にあたり、美しく成長した玉鬘の登場を描く玉鬘巻における、その容姿に関する一節を確認しておく必要がある。

玉鬘巻には、右近の目を通して、玉鬘の容貌を述べる場面がある。

臺灣大學學術期刊資料庫

主流の二本と読み比べると、麦生本系統には以下のように異同が見られる。

◆資料⑩

【大島本】・【尾州家河内本】

うちなきておはするさまいとめやすし。かたちはいとかくめでたくきよげながら、ゐ中・び、こち＜踊り字＞しうおはせましかば、いかにたまのきずならまし。（七四〇10-12）（一七五 13-14）

【麦生本】・【阿里莫本】

打・なきておはするさまめやすし。かたちはいとかくめでたくきよらながら、ゐ中び、こち＜踊り字＞しうおはしまさましかば、いかに玉のきずならまし。（222684-2696）

まず、「おはす」を「おはします」に変え、玉鬘に使用される敬語の程度を高めている。その上、その美しさを描く際に、「きよら」という言葉が使用されていることに注目すべきである。

前者は資料⑨で引用した胡蝶巻の例と同じ手法を使用しており、共通した校訂姿勢が見て取れる。また、後者に関しても、同巻において玉鬘を評価する際に、「めやすし」が多用されていること[11]や、玉鬘の身分[12]から考えると、必ずしも適切とは言えないが、玉鬘の美質を分かりやすく描くための改変であることは理解できる[13]。

しかし、以上の描写を踏まえて初音巻を読むと、玉鬘に関する描写には気になる点がある。元旦の夕べ、源氏は女君たちを見舞いに六条院を歩き回る。西の対に住む玉鬘を訪れた際に、その住まいに

[11] 資料⑩の他にも、玉鬘が源氏と対面した際に使用されている。
[12] その母の夕顔は三位中将の娘にすぎない。
[13] 玉鬘巻の性格について考察する拙論(2019)「『源氏物語』玉鬘巻の本文様態―麦生本系統を中心に―」『台湾日本語文学報』46、台湾日本語文学会 pp.87-88においても言及している。

臺灣大學學術期刊資料庫

関する描写が見られる。

◆資料⑪

【池田本】・【尾州家河内本】

こまやかなる御てうどはいとしもとゝのへ給はぬを、さるかたに物・ものきよげにすみなしたまへり。(七六六 10-11)・(一九一 01-02)

【麦生本】・【阿里莫本】

こまやかなる御てうどはいとしもとゝのへぬを、さるかたに物きよげにすみなし給へり。(230429-35)

まず、主流の二系統と比べ、「とゝのへ」の後に「給」が付けられていないことに気づく。文末の「給へり」が残っているため、早急に待遇表現が下げられていると決め付けるべきではないが、更に読み進めると、玉鬘の住み方に「物きよげ」が使用されていることに気づき、麦生本系統の玉鬘巻における「きよら」の使用が思い出される。

部屋の有様を描く言葉として使用されており、本人の描写そのものではないため、一致しないことは容認できるが、住まいの様子のみならず、その容姿に関する描写にも当該語彙が使用されている。

◆資料⑫

【池田本】・【尾州家河内本】

かみのすそ(××)すこしほそりてさはらかにかゝれるしもいと物・ものきよげに、こゝかしこいとけざやかなるさまし給へるを…(七六六 14-七六七 01)・(一九一 04-05)

【麦生本】・【阿里莫本】

かみすこしほそりてさはらかにかゝれる(×)しもいと物(××)・きよげにこゝかしこもいとけざやかなるさまのし給へるを…(230464-77)

玉鬘の美しさには一点の曇りもなく、光り輝いていると褒め称え

臺灣大學學術期刊資料庫

た上で、引用文のように、髪のすそこそ少し細くなって、着物にかかっているが、その姿はかえって「物きよげ」に感じられ、ありとあらゆるところがあざやかに見受けられると補足する。

この一節において、池田本と尾州家河内本には「髪のすそ」、麦生本系統には「髪」とあるが、玉鬘の美質を肯定する点においては共通しているため、取り立てて異同はない。

しかし、看過できない点がある。玉鬘巻においては初登場で、まだ垢抜けていない玉鬘に早々と最上級の「きよら」を使用しているにも関わらず、初音巻の玉鬘の美を評価する言葉として、「きよげ」が使用されているのである。

何故、待遇表現にこのようなばらつきが起こるのだろうか。可能な原因として、以下の三つが挙げられる。一つ目は巻の性質による違いである。玉鬘十帖の二巻目に位置するとはいえ、初音巻は新春を迎えた六条院の和やかな全体像の描写を中心とした巻であるため、巻の趣旨をよそに玉鬘をむやみに持ち上げることを控えたことが考えられる。二つ目として、校訂者個人が必ずしも全体的な用語の一致に気を配っておらず、各場面を読む際の思いつきで校訂を行っていることが挙げられる。三つ目は、同系統の校訂作業が同一人物によって行われていないことである。凡その方針は決められているものの、細部の表現に関しては、必ずしも一致していない。そのため、巻によって表現に対する拘りが異なることも想定できる。

現段階では、早急に理由を上述のいずれかに断定することは控えたい。ただ、初音巻における玉鬘に関する描写から、麦生本系統の校訂姿勢にこのような可能性と問題点が存在していることは浮き彫りとなった。

四、おわりに

本論は玉鬘十帖において、第二・三巻にあたる初音巻と胡蝶巻を取り上げた。麦生本系統独自の特徴が見られることを確認した上で、玉鬘に関する描写について考察を行った。その結果、胡蝶巻におい

臺灣大學學術期刊資料庫

て、十帖中の首巻にあたる玉鬘巻と同じく、玉鬘を持ち上げる表現が使用されているのに対し、初音巻の場合、玉鬘を描く際に他本以上に玉鬘の美質を強めるために付け加えられた文言は特に見当たらなかった。

この結果を受けて、可能な理由をいくつか挙げ、麦生本系統の校訂姿勢とその背景について推論を行った。ただし、問題を解明し、本当の理由を突き止めるには、なお考察を続けることが必要である。そのためには、注意すべき点がいくつか挙げられる。まず、他巻に見られる類義語の置き換えがどの巻に見られる[14]か。また、文体的、もしくは表記的特徴[15]が一致しているかどうか。一見微細であるが、上述の問題に細心の注意を払うことは、麦生本系統の生成背景の解明につながると考えられる。

【付記】本稿は科技部専題研究計画「《源氏物語》的異文成因−以麥生本、中京大本及阿里莫本為主−」（MOST106-2410-H-002-224-）による研究成果の一部である。

【参考文献】

秋山虔・池田利夫（1977）『尾州家河内本源氏物語　第二巻』東京都、武蔵野書院

伊井春樹（1999）『CD-ROM 版　角川古典大観「源氏物語」』角川書店

池田亀鑑（1979）『源氏物語大成　巻二　校異篇』八版、東京都、中央公論社

岡嶌偉久子（2010）『源氏物語写本の書誌学的研究』初版　東京都、おうふう

[14] 例えば、夕顔巻と少女巻は他本に「いぶかし」とある箇所を「ゆかし」に書き換える点において共通しており、その親近性が推し量れる。

[15] 例えば、初音巻には「渡り」という意の「わたり」が「はたり」と書かれる箇所が二つあり、校訂者によるハ行転呼音の誤用の可能性がある。

臺灣大學圖書館

源氏物語別本集成刊行会(1993)『源氏物語別本集成　第六巻』初版、おうふう
林欣慧(2019)「『源氏物語』玉鬘巻の本文様態―麦生本系統を中心に―」『台湾日本語文学報』46、台湾日本語文学会

臺灣大學學術期刊資料庫